

令和七年度
浜松学院大学
地域共創学部

一般入試B日程 問題

「国語」

注 意 事 項

1. 問題用紙は合図があるまで開かないでください。
2. 問題用紙および解答用紙に、受験番号および氏名を必ず記入してください。
3. 解答は、すべて解答用紙に記入してください。
4. 試験時間は60分です。
5. 印刷に不鮮明な所がある場合は、挙手して知らせてください。
6. 試験終了後、問題用紙および解答用紙を回収します。
回収が終わるまで、席を立たないでください。

| | | | |
|------|--|----|--|
| 受験番号 | | 氏名 | |
|------|--|----|--|

一 次の文章は、橋本治の小説『角ざとう』の一部である。本文は、父親に自分を認めてもらいたい康頼が、少年時代にテレビのボクシング中継を両親と見ていたときのことを描いたものである。これを読んで後の間に答えなさい。なお、出題に際し表記を一部改めている。

康頼は「喧嘩けんか」というものがどういうことなのか、よく分からなかった。彼の住む世界の中には「ついて行くことに必死」ということはあっても、「その流れに異を唱えて争う」ということは起こりえなかったからだ。

「異を唱える」ということは、「うっかりして間違った答を引き出してしまった」ということであり、それは「違った」と言って謝ることではあっても、争うことではなかった。

康頼は「戦う」とか「争う」ということがよく分からなくて、**A** 康頼は同時に、父親の持つ「正しさ」も疑わなかった。

「お前は友達と喧嘩をしないのか？」と言われれば、それをしたことのない康頼は、「しない」と答えるしかなかった。**A** 「喧嘩ばかりしていた」と言う父親に対してそれを言うことは、恥ずかしかった。

それはまるで、「しない」のではなく、「出来ない」という不甲斐ふがいのなさを認めるようなことだったから。

康頼は、父親に対して嘘うそをつきたくなかった。**A** 同時に、父親から「だらしないやつ」と思われたくもなかった。

だから康頼は、ボクシングを分かつとした。ボクシングを見て「戦う」ということを分かつろうと思った。父親に言わせれば、それは「男にとって一番大事なこと」であるはずだから。

康頼は、「争う」ということも「戦う」ということもよく分からなかった。**A**、康頼には「負ける」ということがどんなことなのか、もう分かっているような気がした。

いつの頃からか、康頼はコーヒーを飲むようになった。両親が康頼の目の前でコーヒーを飲むからだ。

両親はコーヒーに砂糖を入れない。母親は**a** フンマツクリームを入れるが、父親はそれも入れない。両親がコーヒーを飲むその横で、康頼はコーヒー牛乳を飲む。でも、ある時康頼は、自分も父親と同じようにコーヒーを飲みたいと思った。

「それ『ブラック』って言うの？ お父さん」

康頼は父親にそう言った。

「ああ。コーヒーはやっぱブラックだよな」と、父親は満足そうに言った。

ボクシングの試合が終わって、父親の推す挑戦者が見事にチャンピオンを倒した後だった。

満足そうな父親は満足そうにコーヒーを飲み、康頼はそんな男らしい父親を見ている内に、自分も父親と同じようなコーヒーを飲みたくなった。部屋にはまだ淹れたてのコーヒーの匂いが**b**タダヨにおつていて、その香ばしい匂いを嗅ぐだけで、それはきつとおいしいものだと康頼には思われた。

「お母さん、僕もコーヒー飲んでいい？」と言った時、康頼は既に立ち上がっていた。

「眠れなくなっても知らないわよ」と、小学校四年生の息子に対して母親は言った。

康頼は「平気だよ」と甲高い声を上げて、台所に入って行った。

紅茶茶碗ちやわんに母親の淹れたコーヒーの残りを注ぎ、ティースプーンを**c**ソソえた康頼は受け皿の上でカップをカタカタと鳴らしながら、テレビのある居間のテーブルへ運んで来た。

それをテーブルの上に置く康頼を見て、父親は言った。

「ヤス、ブラックにスプーンはいらねェんだよ」

康頼は、「えっ？」と言って父親のカップを見た。ソーサーとコーヒーカップだけがあつて、そこには銀色の子供騙しだまのようなスプーンがなかった。

「あ、そうか」と言う康頼は、**B**「だからブラックは男らしいんだな」と思った。

「飲めるの、あんた？」と、それでも反射的にティースプーンを手にしてしまっている康頼に向かって、母親は言った。

康頼は、手にしてしまったティースプーンが自分を間抜けに見せていることを知っていたが、今更引っ込みがつかないので、右手のティースプーンをそのままにして、左手でカップを持った。

少し温度を失ったコーヒーのやや**C**濁濁った匂いがして、でも康頼はそれをそのまま飲んだ。

それは味がなくて、ただ苦かった。「苦い」ということを知る前に、康頼はそれをカップに吐き出していた。

「汚いなア、もう」

母親が顔を顰しかめる。

「だって苦いんだもん」

康頼は口の中に入れたコーヒーの記憶までも吐き出してしまいたかったのだが、そんな康頼を見て、父親は笑っているだけだった。

父親が笑っているのを見て、康頼はここで敗退したくないと思った。

「砂糖入れていいイ？」

康頼は、誰かに尋ねて許しを得るのではなく、一座に向かって挑戦するように言うと、立ち上がった。

「苦くて苦くて」と言いながら、康頼は台所から角砂糖の箱を持ってきた。封の切つてある角砂糖の箱の中の角砂糖を使うのは康頼だけで、角砂糖は D だった。

康頼はコーヒーの中に角砂糖を二つ立て続けに入れ、それから口の中に残っている苦さの記憶を消す為に、三つ目の角砂糖を抛り込む。それから手馴れた様子でティースプーンを使った。

父親はやっぱり、そんな様子を笑いながら見ている。父親の手には薄灰色の煙を立ち上らせる煙草もあった。

ティースプーンで角砂糖の塊をさつと分解して攪拌した康頼は、それを飲んだ。そしてすぐ皿に置いた。

E「やっば苦い。お母さん、飲んで」

康頼はソーサーごとカップを母親の方に押しやった。

「やアよ、こんなの」と、母親は冷めかかったコーヒーカップを見て、それでも一度息子が口に入れて吐き出したものが入っているコーヒーを飲んだ。飲んで、「甘い」と元に戻した。

「勿体ないんだから」と言つて母親が置き戻したコーヒーカップに、父親が手を伸ばした。「よし、俺が飲んでやろう」と言つて。

父親は角砂糖が三つも入ったただ黒いだけのコーヒーを、「甘い」とも言わず啜つた。康頼の方を見て、父親が「お前もまだ子供だな」と笑いながら言った時、康頼はもう立ち上がつて台所へ向かっていた。

「あんたは今度何すんの？」
首を振じ曲げた母親に向かって飛んで来た康頼の声は、「紅茶淹れる」だった。

「オレは癪だから、紅茶をブラックで飲む」と言つて、今度はソーサーの上で音を立てさせないように、康頼はしずしずと紅茶茶碗を運んで来た。

父親は康頼の甘いコーヒーを脇へ押しやり、自分のコーヒーを舐め、煙草を燻らせている。

康頼は紅茶を一口啜つて、それから **F**「バツが悪そうに、「やっば砂糖入れよう」と、角砂糖の箱に手を伸ばした。

「あんたも忙しいわね」と、母親が言う。

二つの角砂糖を手にした康頼は、「だって、レモン入れてないからブラックだよ」と、子供らしい理屈を言う。

父親はそんな康則に笑いながら、「でもな、本当のブラックは砂糖入れないんだぞ」と言

う。

「分かってるよ」と言った康頼の手の中には、角砂糖が二つあった。二つ目の角砂糖を箱に戻すのが照れ臭くて、康頼は一つをカップの手前にカクすように置いて、一つだけをカップの中に入れた。

「子供じゃないんだから、スプーンは使わない」と、一人で思った。

G 透き通った紅茶の中に落ちた角砂糖は泡を立てた。その泡を通して角砂糖がゆつくりと崩れて行くのが見えた。

紅茶の表面には角砂糖から出た泡の残りが浮いて、底には崩れて溶けきらないグラニュー糖の沈殿が残った。

それが早く溶けないかなと思って、康頼は焦れつつあった。スプーンを手にして、その紅茶の中の砂糖の沈殿を突ついた。突つくだけで、決して掻き回さなかった。

紅茶のしずくのついたスプーンがソーサーの脇に置かれて、そのしずくがソーサーの上の角砂糖についた。

真つ白のきれいな立方体になっていた角砂糖に、薄汚れたしみがついたようだった。

紅茶のしみは角砂糖全体に広がって、康頼はその角砂糖を崩したいと思った。

もう一度角砂糖の上に紅茶を垂らした時、テレビを見ていたはずの母親が、「あんたは何をしてるの?」と言った。

その声につられて、父親が康頼のテモトを見た。

康頼の手からティースプーンは離れていて、ソーサーの上では錆びたように変色してしまった角砂糖が、ぶざまにその稜角をなくしていた。

康頼は「別に」と母親に言っ、あるいは「負ける」とはこういうことかもしれないと思いつながら、そのぶざまになった角砂糖を見ていた。

問一

二重傍線部 a～e に相当する漢字を含むものを次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選び、記号を答えなさい。

a フンマツ

- ① 発掘調査により新たに前方後エンフンが発見された。
- ② 昨年の雪辱を果たすべくチームはフンキしている。
- ③ 富士山がフンカするのではないかと心配している。
- ④ 各地のフンソウが国際情勢を脅かしている。
- ⑤ 救助の現場では隊員たちがフンコツ碎身働いていた。

b タダヨウ

- ① 新たに開発された商品は非常にヒョウバンがいい。
- ② 市議会議員選挙のカイヒョウが始まった。
- ③ 突然の嵐によりボートでヒョウリュウした。
- ④ 道路ヒョウシキが新しいものに取り替えられた。
- ⑤ 試合を終えた選手のヒョウジョウが誇らしげだ。

c ソえる

- ① 今年の夏はテンコウ不順で作物に影響が出た。
- ② 提出されたレポートのテンサクが終わった。
- ③ 分からないことは自主的にジテンで調べた。
- ④ 長期的なテンボウに立って新しい施策を考えた。
- ⑤ 試合後半で思いがけないギャクテン勝利となった。

d カクス

- ① 徳川家康はインキョの後駿府で過ごした。
- ② 高齢者は特にゴインに気を付けなければならない。
- ③ この事件のゲンインはまだ不明である。
- ④ 今回のツアー客はジン巡りを好む傾向にある。
- ⑤ オープンキャンパスで大学によいインシヨウをもつ。

e テモト

- ① 久しぶりに訪れた山奥の家はハイキョと化していた。
- ② 角を曲がるとキョダイな像が姿を現した。
- ③ 初めて会う人とのキヨリ感がうまくとれない。
- ④ 今回の彼の振る舞いはまだキョヨウ範囲内である。
- ⑤ 朝早くからコウキョの周りでは走っている人がいる。

問二 空欄A四か所に補う言葉として最も適切なものを次の語群から一つ選び、解答欄に書きなさい。

語群 【そして だから しかし そのうえ それで そのため】

問三 傍線部B「だからブラックは男らしいんだな」とあるが、康頼の父親がコーヒーに示している男らしさはどのように描かれているか。その説明として**適当でないもの**を次の①～⑤の中から一つ選び、記号を答えなさい。

- ① コーヒーに砂糖は入れない。
- ② コーヒーを飲むときにはソーサーとコーヒーカップだけを使っている。
- ③ 銀色の子供騙しのようなスプーンは使わない。
- ④ コーヒーと共に、薄灰色の煙を立ち上らせる煙草をくゆらせている。
- ⑤ 角砂糖が三つも入った甘いコーヒーを脇へ押しやり、自分のコーヒーを舐める。

問四 傍線部C「濁った匂い」とあるが、それを説明したものとして最も適切なものを次の①～⑤の中から一つ選び、記号を答えなさい。

- ① 淹れたてのコーヒーの香ばしい匂いが、冷めて香ばしさを失ってしまった状態。
- ② 透明感の高かった淹れたてのコーヒーが、温度を失い濁った色に変化した状態。
- ③ 淹れたてのコーヒーが温度を失い、ただ苦い味に変化している状態。
- ④ 康頼がいつも飲んでいるコーヒー牛乳のように濁った色になった状態。
- ⑤ コーヒーを飲んだ記憶もなくなかったという濁った記憶の状態。

問五 空欄Dに補う言葉として最も適当なものを次の①～⑤の中から一つ選び、記号を答えなさい。

- ① 自分を間抜けに見せているもの
- ② コーヒーの記憶を吐き出すもの
- ③ コーヒーの苦さを消し去る薬
- ④ コーヒー時の父親と母親への挑戦状
- ⑤ 康頼と仲のいい友達のようなもの

問六

傍線部E「やっぱ苦い、お母さん、飲んで」とあるが、康頼を見ている父親はどのような父親か。最も適当なものを次の①～⑤の中から一つ選び、記号を答えなさい。

- ① 角砂糖をたくさん使っている康頼をまだ子供だと考え、取り合わない父親。
- ② 康頼の吐き出したコーヒーも飲むような、康頼を受け入れ、可愛がっている父親。
- ③ 貴重なコーヒーを吐き出す康頼の軽率さを許せないことを行動で示す父親。
- ④ 残したコーヒーを母親に飲んでほしいと願う康頼に対する、挑戦者としての父親。
- ⑤ 康頼の吐き出した甘いコーヒーを脇へ押しやるような、息子に淡白な父親。

問七

傍線部F「バツが悪そうに」とあるが、この説明として適当でないものを次の①～⑤の中から一つ選び、記号を答えなさい。

- ① きまりが悪そうに
- ② ぐあいが悪そうに
- ③ 罰が悪そうに
- ④ 気まずそうに
- ⑤ 場都合が悪そうに

問八

傍線部G「透き通った紅茶の中に落ちた角砂糖は泡を立てた。その泡を通して角砂糖がゆつくりと崩れていくのが見えた」とあるが、本文から分かる「角砂糖」の形象を説明したものとして最も適当なものを次の①～⑤のうちから一つ選び、記号を答えなさい。

- ① 角砂糖は純白で稜角のはっきりとしたものだが、溶けてなくなるはかないもの。
- ② 角砂糖は熱い紅茶の中で泡を立てて崩れていく、ゆつくりとした優雅なもの。
- ③ 角砂糖は崩れて溶けきれない沈殿をカップの底に残すような、じれったいもの。
- ④ 角砂糖は真っ白な立方体であるため、しみがつくと錆びたようななぶざまなもの。
- ⑤ 角砂糖は紅茶の中で泡を立てて崩れるとスプーンで突つきたくなくなるようなもの。

問九

本文からは、次の一段落が脱落している。これを補うのに適切な場所の記号【ア～オ】を答えなさい。

一滴のしずくが白い立方体の一隅を薄茶色に透き通らせて汚した。しみのついた角砂糖は、もう美しくなかった。康頼は思いついたようにティースプーンを取って、その汚れてしまった角砂糖の上に熱い紅茶のしずくを垂らした。

問十

傍線部 H 『負ける』とは「こういうことかもしれない」とあるが、「角砂糖」「戦う」「喧嘩」「ボクシング」という言葉を使い、百五十字以上、二百字以内で「負ける」ことについて、の康頼の考えを書きなさい。ただし、字数には句読点などの記号を含むものとする。

二 次の文章は、古代植物染の復元に取り組む吉岡幸雄の著書『日本の色を染める』の一部である。これを読んで後の問に答えなさい。なお、出題に際し表記を一部改めている。

世界のどの地域でも見られることだが、日本人の宗教の源も、自然界に存在する象徴的なものを **A** し、 **a** スウハイするものであった。大樹が茂り人間が容易に近づくことができない急峻な山、海に突き出した岬や奇岩、村にあるひとときわ高い樹木、海原、豊かな水をたたく川、そして岩などには神が **B** し、またそこに宿っているとして崇めてきたのである。

農耕社会となってからは、人びとは春にはその年の豊作を祈り、秋には収穫に感謝する新嘗にいなめの祭礼などを自然の神に捧げてきた。

六世紀にいたって、日本には新しい信仰の波が押し寄せてきた。仏教の伝来である。神々の国日本に伝えられた仏教は、まず渡来人の集団に **C** され、豪族のなかでは蘇我氏がそれにつづいた。蘇我氏とそれに対抗する物部氏とのあいだで崇仏をめぐる戦いが起こり、蘇我氏が勝利すると、それをうけて仏教は飛躍的に発展していく。

中国において発展した大乘仏教が朝鮮半島を経て日本へ伝えられたということは、それまでに日本には見られなかったまったく新しい華麗な色彩が天から舞い降りるかのように広がっていったということでもある。

仏教の伝来にもなつて、五八八年、百濟から、寺工、あすかであら（注1）鑪盤博士、瓦博士、ろばんはかせ画工えだくみなどの技術者が日本へ渡来してきて、飛鳥寺の造営がはじまった。柱木は皮がむかれて丸太となり、そこには朱しゆあるいは弁柄べんがらの赤が塗られ、れんじまじ（注2）連子窓には緑青ろくしょう（マラカイト）が塗られて縞模様をなし、塔の上には金色に輝くそうりん（注3）相輪がそびえた。堂内に安置される仏像は、これも金でとぎん（注4）鍍金された金銅仏で、扉が開けられて陽の光が射すと、金色に輝き、参拝に訪れた人びとはそれら極彩色の世界に **D** 驚きを禁じえなかったことであろう。

こうした渡来人とその文化が相まって、政治にも新しい潮流が生まれた。五九三年に即位した女帝推古天皇は、甥の聖徳太子を摂政として政務にあたらせた。聖徳太子は新しい政策を遂行するにあたり、仏教を中心とする国家を形成しようとして、斑鳩寺いかるが（法隆寺）を建立した。

聖徳太子の新しい政策のなかで、日本の色彩史において重要なものは、冠位十二階の制である。それまでの冠位が「氏」にあたえられ、**E** 世襲されるものであったのを、個人の才能や功績に応じてあたえ、さらに昇進できることを目的としたものであった。この制度の根源は中国にある。つぎの五行思想の表と冠位十二階を見比べていただきたい。

色彩としては、はじめ中国ではこの五行思想にもとづいて、中央の土にあたる黄色が尊ばれていたが、のちに太陽あるいは火を意味する赤が正色だと考えられるようになった。ところがいまからおよそ二千五百年ほど前、周の春秋時代に、五色に加えて、青と赤の間色であ

る紫が尊ばれるようになってきた。そのころに、儒教を確立した孔子の『論語』陽化篇には「**F** 紫の朱をうばうを悪む」とあり、そのような**b**セソウというか、流行を嘆いている。色彩の位としては、五色から六色へと移ったことになる。中国ではそれがつづいていたように、日本が隋の国の制度をまねたおりもそれを踏襲しているのである。

H 冠位十二階を見ると、五行の配当表の「五常」の「仁」の上に、「徳」すなわち紫がもうけられていたことがわかる。官人の冠には、それぞれの色に染めた布が縫いこめられ、さらに冠位の色にもなった服装を着用することになっており、儀式の場に臨む官人たちの身分は、冠と衣服の色によって一目でわかるものとなった。

東洋五行配当表

| | | | | | | | | | | | | |
|-----|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|-----------------|----------------|--------------|--------------|
| 五行 | 木 | 火 | 土 | 金 | 水 | | | | | | | |
| 五色 | 青 | 赤 | 黄 | 白 | 黒 | | | | | | | |
| 五方 | 東 | 南 | 中央 | 西 | 北 | | | | | | | |
| 五時 | 春 | 夏 | 土用 | 秋 | 冬 | | | | | | | |
| 五事 | 貌 | 視 | 思 | 言 | 聴 | | | | | | | |
| 五臓 | 肝 | 心 | 脾 | 肺 | 腎 | | | | | | | |
| 五常 | 仁 | 礼 | 信 | 義 | 智 | | | | | | | |
| 十干 | コウ 甲 きのえ | オツ 乙 きのと | ヘイ 丙 ひのえ | テイ 丁 ひのと | ボ 戊 つちのえ | キ 己 つちのと | コウ 庚 かのえ | シン 辛 かのと | ジン 壬 みずのえ | キ 癸 みずのと | | |
| 十二支 | イン 寅 とら | ボウ 卯 う | シ 巳 み | ゴ 午 うま | シン 辰 たつ | ジュツ 戌 いぬ | チュウ 丑 うし | ビ 未 ひつじ | シン 申 さる | ユウ 酉 とり | ガイ 亥 い | シン 子 ね |

| 聖徳太子の冠位十二階(603年制定) | | | | | | | | | | | |
|--------------------|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|
| 大徳 | 小徳 | 大仁 | 小仁 | 大礼 | 小礼 | 大信 | 小信 | 大義 | 小義 | 大智 | 小智 |
| ∨ | | ∨ | | ∨ | | ∨ | | ∨ | | ∨ | |
| 徳 | | 仁 | | 礼 | | 信 | | 義 | | 智 | |
| ∥ | | ∥ | | ∥ | | ∥ | | ∥ | | ∥ | |
| 紫 | | 青 | | 赤 | | 黄 | | 白 | | 黒 | |
| ∧ | | ∧ | | ∧ | | ∧ | | ∧ | | ∧ | |
| 濃紫 | 淡紫 | 濃青 | 淡青 | 濃赤 | 淡赤 | 濃黄 | 淡黄 | 濃白 | 淡白 | 濃黒 | 淡黒 |

『日本の色辞典』(紫紅社, 2000年)より

このような服飾は、朝廷より下賜されたものであるから、おそらく錦織部のような公の染織工房があつて、国の命で仕事をしていたと推察される。ということは、この時代に、日本において華やかな色彩を染める植物染の技法が十分に実在していたという証しでもある。

聖徳太子はまた、六〇七年、中国の隋へ特使小野妹子を送り、倭の五王の時代から、じつに百数十年ぶりに大陸と交渉を再開した。翌年には隋の国使裴世清が来日し、それを機会に多くの留学生や僧侶が海を渡った。このような大陸との交渉のなかで、中国でつくられてい

た、より高級な絹織物も多くもたらされ、宮中はもちろん、寺院の装飾あるいは貴人たちの衣服を華麗なものとしていった。そのような染織品の一部は、千三百年の歳月を経たいまも法隆寺に伝世し、私たちが目のあたりにすることができる。

そのひとつに「蜀江錦」と名づけられたものがある。赤地に経の糸を浮かして文様をあらわす経錦と呼ばれる技法で織られている。これは、中国で紀元前後にはすでに用いられていた、機の高いところに人がのり、経糸を上げ下げする空引機で織られ、織技としては完成度の高いものである。「蜀」は現在の中国四川省のあたりを指すといわれ、当時この地で赤地の錦を織ることを得意としていたとされるところから、その名がつけられたと考えられている。

法隆寺にはこの種の裂が、格子花文、亀甲唐花文、双鳳連珠円文と、三種伝わる。このうち双鳳連珠円文とほぼ同じものが、イギリスの探検家オーレル・スタインによって中国西域のトルファンのアスターナ遺跡から発掘されている。なお、格子花文は敦煌莫高窟の文様に描写されている。

もうひとつ、聖徳太子ゆかりの裂として、「太子間道」と呼ばれる経縋がある。縋というのは、機にかける前に糸を部分的にくくって染色し、染料がシントウしたところとそうでないところの対比によって文様をあらわす技法である。

縋はインド、インドネシア、日本、そして中米メキシコ、南米アンデスなど世界の各地でおこなわれてきたが、法隆寺のそれは、現存する世界最古のものである。その生産地については諸説あるが、中国の内陸部の漢民族系の人たちには縋をつくった形跡が見られない。現在も西域の、ホータン、アフガニスタン、トルコなどいわゆるトルキスタン系の人びとによって織られている縋とよく似ていることから、私は、そのあたりが故地ではないかと推測している。

このような裂類はいつごろ法隆寺にもたらされたのだろうか。法隆寺の金堂には四仏浄土図と八菩薩像が描かれている。昭和二十四年（一九四九）の火災で消失したが、第三壁の観音菩薩像の僧衣の腰のあたりには、太子間道を見て描いたと考えられるような文様が表現されている。同じく第六号壁の観音像には蜀江錦が描かれており、七世紀の前半に遣隋使が持ち帰った可能性が高いと思われる。法隆寺に伝来する裂類は、千数百年を経たいまも美しい色彩をのこしており、その **U** にたずさわる私も、見るたびに新しい感動をおぼえるのである。

とりわけ私は、赤系の色に目を奪われる。中国およびその周辺の地域では、赤を染めた材料としては、茜、紅花、蘇芳、そしてラククという貝殻虫の染料の四つが考えられる。

そのなかで、退色しやすい紅花と蘇芳は、法隆寺裂からはまず除外してよいように思われる。そうすると茜か、虫のラククである。中国あるいは日本に生育する茜による染色では、

赤のなかにもかなり黄味が感じられるが、蜀江錦の赤をじっくり見ていると、どちらかと言えば青味が感じられる。断言は控えたいが、私の実感としては、ラックで染めた可能性が高い。

このような貝殻虫は、世界に一万種もいるが、色素とその樹脂分が古くから実用的に用いられてきたのは、つぎの三種である。

ラックカイガラムシ(アジア)

ケルメス(地中海)

コチニール(中南米)

ラックカイガラムシは、オオバマメノキ(マメ科)やアコウ(クワ科)、ライチ(ムクロジ科)、イヌナツメ(クロウメモドキ科)などに寄生、共生していて、赤色の色素を含んだ樹脂と蛋白質の分泌物でみずからの身体をおおっている。東洋においては、インド、ブータン、ネパール、チベット、ミャンマー、タイ、インドネシア、中国南部で採集される。漢字では紫鉱と記されており、唐の時代に編纂された『新修本草』にも見えるところから、その使用はかなり古くからであったと見られる。

日本にはおそくとも奈良時代には **K** 将来されて、正倉院に収蔵されている薬物のなかにも、雌虫が分泌したヤニ状の物質がついたままの細枝が保存されている。『種々葉帳』には「紫鉚」と記されている。

これを染色に用いるには、まずこの固まった樹脂を少量の米酢を入れた湯のなかで煎じる。すると液は赤くなり、その一方で樹脂は容器の底にたまる。赤い液だけを取り出し、そこへ絹糸を浸けておよそ三十分繰る。そのあとよく水洗する。そして天然の明礬みょうばんを湯で溶かした大きな浴槽で約三十分繰る。このような **d** コウテイを何度も繰り返していくと、青味のある鮮やかな赤色に染まる。ちなみに、近代では色素を抽出したあとの樹脂は、電気絶縁材や古くはSPレコード盤などにも使われた。

法隆寺には、中国から **K** 将来された裂きれだけではなく、七世紀に日本で作られた裂ものこされている。「繡しゅう仏」と称されるもので、刺繡によって(注5)瑞雲にのり琴を奏する天人の姿をあらわしている。いまでは小さな断片にすぎないが、かつては寺院の柱、軒先などにかけられた(注6)幡ばんや幟のぼりの足の部分であった。紫草の根で染められた紫、茜で染められた緋の色、蓼藍たであいによる縹色はなだいろう(薄い藍色)、刈安と思われる黄色、藍と黄色の染料をかけあわせた緑と、多彩に染められた糸に強い撚りよをかけて、経糸を交叉させて織りあげた羅という薄い絹布に刺繡している。

法隆寺のすぐ東隣にある尼寺中宮寺には、推古天皇三十年(六二二)に亡くなった聖徳太子を **e** ツイボついでして、その妃橘たちばなのおおいらつめ 大郎女がつくらせたという「天寿国繡帳」が伝えられている。その残欠部には、蓮台にのる仏像、僧侶や一般の人びと、飛雲に鳳凰、唐草、兔、亀、

仏教寺院など、聖徳太子が往生された天寿国の様子が描かれている。この「天寿国繡帳」を見ると、日本でも、中国や朝鮮半島におとらない植物染料による染め技術が完成していたことがうかがえ、また、人物像からは、当時の宮廷の貴族の服装がどのようなものであったかを推測することができる。

(注1) 罽盤ろばん・・・罽炉裏のこと。

(注2) 連子窓れんじまど・・・採光、通風、防犯を目的とし、細い木材または竹を、縦または横に一定の間隔で並べた窓。寺院や神社の本堂や回廊で用いられる。

(注3) 相輪そうりん・・・仏塔の屋根から天に向かって突き出た金属製の部分の総称。

(注4) 鍍金とくきん・・・金属などの表面を他の金属の薄膜で覆うこと。メッキ。

(注5) 瑞雲すいうん・・・仏教などで、めでたい兆しとして出現する紫色や五色の珍しい雲。

(注6) 幡ばん・・・仏、菩薩の威徳を示すための仏具で、法要や説法するとき、寺院の境内や堂内に立てる布。

問一 二重傍線部 a ~ e のカタカナを漢字に改めなさい。

問二 空欄 ABC に補う言葉として適当なものの組み合わせを次の ① ~ ⑤ の中から一つ選び、記号を答えなさい。

- | | | | |
|---|------|------|------|
| ① | A 信心 | B 君臨 | C 畏敬 |
| ② | A 信心 | B 降臨 | C 畏敬 |
| ③ | A 信心 | B 畏敬 | C 君臨 |
| ④ | A 畏敬 | B 降臨 | C 信心 |
| ⑤ | A 畏敬 | B 君臨 | C 信心 |

問三

傍線部D「驚きを禁じ得なかった」とあるが、その様子を説明したものとして**不適切**なもの^なものを次の①～⑤の中から一つ選び、記号を答えなさい。

- ① 驚く気持ちを抑えられなかった。
- ② 非常に驚いた。
- ③ 驚嘆に値した。
- ④ どう考えても驚きの気持ちがわきあがってきた。
- ⑤ 驚くことが禁じられていた。

問四

傍線部E「世襲」傍線部G「踏襲」と同じ意味で傍線部の言葉を使っているものを次の①～⑤の中から一つ選び、記号を答えなさい。

- ① 襲撃
- ② 襲名
- ③ 襲衣
- ④ 奇襲
- ⑤ 強襲

問五

傍線部F「紫むらさきの朱あけをうぼう」とあるが、これを説明したものとして最も適切なものを次の①～⑤の中から一つ選び、記号を答えなさい。

- ① 紫から青が奪われて朱に近づくこと。
- ② 紫から朱が奪われて青に近づくこと。
- ③ まがいものが本物にとって代わりその地位を奪うこと。
- ④ 朱が紫に似たような色に変化していくこと。
- ⑤ 色の名前が奪い合いとなり朱が紫と言われるようになったこと。

問六

傍線部 H 「冠位十二階を見ると、五行の配当表の『五常』の『仁』の上に『徳』すなわち紫がもうけられていたことがわかる」とあるが、文中の二つの表の内容を整理するため、次のようなメモを作成した。I に入る最も適切な言葉を文中から探して書き出さない。

【メモ】「東洋五行配当表」と「聖徳太子の冠位十二階」の違い

- ① 「聖徳太子の冠位十二階」では「東洋五行配当表」の五常が大小で分かれている。
- ② 「聖徳太子の冠位十二階」では「東洋五行配当表」の五色が濃淡で分かれている。
- ③ 「聖徳太子の冠位十二階」では「東洋五行配当表」の「仁」の上に「徳」つまり「紫」が新設されている。
- ④ 「聖徳太子の冠位十二階」では「東洋五行配当表」の「五常」が「六常」となり大小に分かれたため I となっている。

問七

空欄 J に補う言葉として最も適当なものを次の①～⑤の中から一つ選び、記号を答えなさい。

- ① 復元
- ② 売買
- ③ 輸入
- ④ 指導
- ⑤ 生産

問八

傍線部 K 「将来」と二か所あるが、この意味を説明したものとして最も適切なものを次の①～⑤の中から一つ選び、記号を答えなさい。

- ① これからずっと先のこと。
- ② 未来永劫。
- ③ 将来を囑望されること。
- ④ 努力の末発見されたこと。
- ⑤ 外国など他の土地からもってくること。

問九

筆者は、色にまつわる内容を歴史的背景とともに述べている。あなたが本文を読んで初めて知った色に関する内容を、歴史的背景を踏まえて百十字以上、二百字以内で書きなさい。ただし、字数には句読点などの記号を含むものとする。